

## 菅原宗賢〈すがはらそうけん〉の話（三木市大塚）

北条時頼〈ほうじょときより〉の時代というと、ずいぶん昔の話です。大塚というところに菅原宗賢〈すがはらそうけん〉というお医者がありました。この人はただの医者ではなく百姓のために恵美須〈えびす〉駅裏の「池の内」に池を掘った人でした。宗賢池、なまって、「そうけ池」と呼ばれています。

宗賢はまた、旅行ずきで、ひまさえあれば名所旧跡〈きゅうせき〉をたずねて旅し、歌を作ったりすることを楽しみにしていました。あるとき、姫路まで出かけての帰りに「石の宝殿〈ほうでん〉」で一人の旅僧〈たびそう〉と出会いました。道づれになった二人は、いろいろの話をかわしているうちに、どちらともなく心をよせあうようになりました。

「ここまでくれば、私の町も近いですし、ちょうど祭りに間にあいますからお急ぎでなければ、ぜひおいでください。」

と、さそいました。旅の僧も、

「それじゃひとつ、おことばにあまえてごやっかいになりましょう。」

こうして旅の僧は三木まで足をのばし、しばらく宗賢の家にわらじの紐〈ひも〉をときました。祭りもすんで旅僧が、

「ながらくお世話になりました。」

と、いとまごいを申しますので、宗賢は、

「私もひまですし、久しぶりに明石見物もしたいところですから、そこまでごいっしょしましょう。」

こうしてまた、二人の旅がはじまるのですが、話がはずんで、もう少し、もう少しと別れをのぼしているうちに箱根〈はこね〉をすぎ、鎌倉〈かまくら〉の手前まできてしまいました。

二人はそこで宿をとりましたが、旅僧は、紙に馬と駕籠〈かご〉をえがき、

「どっちがよいか。」

と、いうのです。宗賢は、

「駕籠がよろしうございますね。」

と、答えました。朝になって、旅僧が、

「ここまでくれば、わしの家も同然。わしもお宅〈たく〉でながらく遊ばせていただいたから、こんどはわしの家で、ゆっくりりしてくれるように。」

宿を出てしばらくすると、東の方から、いかめしい行列〈ぎょうれつ〉が進んできます。

「あの行列はりっぱですね。どなたの行列でしょうか。」

と、たずねると旅僧は、

「あれは、わしを迎〈むか〉えにきたのだよ、あなたは、あの駕籠に乗ってもらいましょう。」

と、すすめました。宗賢は思いがけなく、駕籠で鎌倉のおやかたまでつれてこられました。そこではじめて旅の僧が時頼入道〈にゅうどう〉さまであったとわかって、冷〈ひ〉やあせをかく思いでした。頭を低くして、無礼〈ぶれい〉のかずかずをおわびいたしました。時頼は、

「いやいや、こちらこそお世話になったのだから、そんなにえんりょうは無用じゃ。また何か望みがあれば申し出られよ。」

宗賢はしばらく考えていましたが、思い切って申しました。

「私の住む三木はあまりゆたかでございます。租税〈そぜい〉を免除〈めんじょ〉していただければ、百姓や町の人びとにとってこんなしあわせはないと思います。」

宗賢のことばに、じっと耳をかたむけていた時頼は、

「ああ見上げたものじゃ。自分だけのことを考えないで、民百姓〈たみひやくしょう〉のしあわせを願っている。」

と、感心なさって、ただちに「三木を免租地〈めんそち〉にする。」という書つけを彼にあたえました。

ありがたいおみやげを持って勇〈いさ〉んで帰り、喜びを分かちあいました。

